

松井軍司令官付・岡田尚氏の証言

明治から昭和にかけて、頭山満、萱野長知など、中国革命を助けた日本人はたくさんいたが、岡田尚^シ氏の父・有民氏もその一人で、国民党西山派を援助したり、また、福建人民政府が樹立された時、当時の台湾軍司令官・松井（石根）大将と共に、福建人民政府と国民政府との間に立ったりした。そのため、岡田有民氏は、松井大将と親しく、尚氏も松井大将を子供の時から知っていた。

昭和十二年八月松井大将が上海派遣軍司令官に親補されると、岡田氏は、松井大将の自宅と呼ばれ、軍司令部嘱託、軍司令官付として同行することを命ぜられた。それは、岡田氏が上海語ができて、中国の要人に知り合いがあることから、これら要人と連絡をとり、中国と早期和平工作をするためであった。岡田氏は、昭和十三年二月下旬に松井大将が凱旋するまで、松井大将の特命をうけて上海・南京・香港で働いた。

岡田氏との特別な関係から、松井大将は、公的には見せない心のうちを岡田氏にのぞかせている。また、松井大将が南京に入ってから、岡田氏は常に松井大将のそばにいた。このことから、岡田氏を通して、松井大将が南京攻略戦をどう考えていたか、あるいは、松井大将が南京で何を見たか知ることができる。それ故、岡田氏からは、岡田氏自身が南京で見たことと共に、松井大将が考え、南京で見ていたこともうかがった。

南京陥落が間近になった十二月七日、岡田氏は松井大将と共に蘇州に行き、ここで、南京城内に撒く降伏勧告文の翻訳をした。この降伏勧告文は、九日、南京城内にばらまかれ、十日が返答指定日にあてられた。しかし、中国軍は拒否し、日本軍の総攻撃が開始された。南京陥落後、松井大将は南京に入ったが、この間、岡田氏は終始行動を共にし、十二月二十二日、松井大将と共に水雷艇鴻で上海に帰った。その後、再び租界工作に専念した。二月下旬、松井大将が凱旋することになったが、岡田氏はそのまま残り、維新政府ができると、原田（熊吉）少将が最高顧問、岡田氏は維新政府顧問部事務局長をつとめた。

戦後、岡田氏は会社を経営し、長年、医学書出版をやってきた。お会いした時、七十八歳であるが、週二回は会社に顔を出すという。

話は、昭和十二年十二月八日、軍司令部が蘇州にあった時のことから始まった。

——降伏勧告はどなたの発案ですか。

「松井大将です。上海とその後で、日本軍は想像もできない位やられまして、兵士たちは殺気立っていました。兵士だけでなく、連隊長クラスまでそうでした。もともと十分な準備を行っていたる訳ではありませんし、兵力も充分ではありませんでしたから当然だと思えます。こういう状況での攻撃ですし、しかも中国の首都への入城ですから、松井大将は平和裡に入城したいと思って降伏勧告をすることにしました訳です」

——兵隊たちはそんなに殺気立ってましたか。

「ええ。中国兵がこんなに強いとは思ってなかったし、それが想像以上だったからだと思

います。まして兵隊にしてみれば戦友がやられてますからね。松井大将は兵隊のそういう気持ちもわかってました。だからこそ降伏勧告したのです」

——十日の正午が返答指定時間ですね？

「そうです。塚田（攻少将）参謀長、公平（匡武中佐）参謀、中山（寧人少佐）参謀と私の四人で中山門の近くまで行きました。その時、攻撃中止命令が出てましたが、実際は、紫金山では戦闘が続いていました。そういう中を中山門に行きました。結局、軍使が来なかったの、今後どうするか決めるため、急いで蘇州に戻りました。それで総攻撃に移ったのです。降伏勧告を拒否したと聞いて、松井大将はがっかりしてました」

——蘇州にはいつまでいましたか。

「二日くらい蘇州にいて、いよいよ南京が陥落たというので、私は管理部の村上（宗治）中佐と湯水鎮まで進みました。湯水鎮に行く途中のことですが、日本兵がクリークの土手で捕虜を刺殺してました」

——何日のことですか。

「十二日だと思います。午後一時頃でした。千人から二千人位の中国兵が空地に座らされて、中には女の兵士もいました。何人かを土手に並べて刺殺していましたが、それを見て残虐だと思っていると、村上中佐が車から降りて、指揮官の中尉か少尉にそのことを言いました。すると、戦の最中だし、これしか方法がないと言われましてね、そう言われるとわれわれも何も言えません。

指揮官は弾が大切なので射ち殺すわけにはいかない、司令部には問い合わせていない、と村上中佐に言っていました。中国兵をどんどんやって、南京に行くことしか頭になかったと思います。さきほど言いましたように、殺気立っていましたし、捕虜をどうしたらよいか方法がなかったと思います」

——全員を処刑したのですか。

「それはわかりません。私たちはすぐそこを出発しましたから」

——南京には何日に入つたのですか。

「十三日か十四日か記憶がはつきりしないのですが、たぶん十三日だと思います。

村上中佐と湯水鎮に一晚泊り、車で南京に行きました。南京が陥落したら、軍司令部宿舎設営と入城式の準備がありましたから」

——その時点で入城式を行なうことは決まっていたのですか。

「ええ。十七日かどうか記憶がありませんが、入城式をやるというのは決まっていました。それで、南京に入って、国民政府の建物を式場にすることに決めました。宿舎の方は、首都飯店を軍司令部の宿舎にすることになり、私もここに泊り、松井大将が泊るための準備などしました」

——入った時の南京城内の様子はどうでした？

「市内じゅう軍服、ゲートル、帽子が散乱していました。これは凄い数で一番目につきました。中国兵が軍服を脱いで市民に紛れこんだのです。中国兵にしてみれば、軍服を着て

ると日本軍にやられますから当然だと思えます。中山門の城壁にもたくさんのゲートルがたれさがつていまして、中国兵はゲートルを使って城壁から逃げていったのだと思えます。脱ぎ捨てられた軍服などは、大西（二）大尉のもとに、ひげのはえた孫そんという人を中心に治安維持会をつくってかたづけさせました。

城内の店は空屋になってまして、中国兵が逃げる時略奪したのか、日本兵が入城してから略奪したのか、ともかく略奪の跡がありました。

日本兵は食べ物は略奪したと思えますが、そのほかは中国兵などがやったようです。

昭和十三年三月に維新政府ができる私も南京に行きましたが、泥棒市にはおびただしい豪華な絨緞や骨董品がありました。これらはその時に略奪したものだと思えます。この時、私も居を構えるため絨緞を買いました」

—— 陥落直後に日本兵の（市民への）残虐行為があったと言われてますが、残虐行為を見えますか。

「見てません。城内には死体はありませんでした。ですから一般市民に対しての残虐行為はなかったと思います。そりや皆無とは言いません。あの兵隊の数ですから、強姦とか強盗は何件かあったでしょう。しかし、その数は知れています。当時は日本の外交官も南京に来てまして、強姦などがあると領事館に訴えてましたからその数はわかりますし、それは数えるほどです。虐殺したということはありえませんが、その時、福田（篤泰領事官補。のち防衛庁長官）さんがその仕事にあたっていたと思えます。

それと、城内で火事があったとよく言われますが、私は記憶がありません。昭和十三年の三月、南京に行った時、大きい建物はそっくり残っていましたし、その他の建物も残っていて、維新政府の幹部や将官の宿舎にあてています。私も一軒、家をもりました。ですから、火事があった建物が多くが焼けたということはありません」

—— 虐殺は見えていなくとも、話は聞いてませんか。

「捕虜の話は聞いてます。下関シキガキで捕虜を対岸にやるうとして、とにかく南京から捕虜を放そうとしたのでしょね。その渡河の途中、混乱が起きて、射ったということは聞きませんでした」

—— 大虐殺があったと言われていますが……。

「市民は難民区に十四、五万いまして安全だったので、捕虜や敗残兵をやったことはあると思えます。それは私も湯水鎮トウスイジンで見えますから。日本兵もぼろぼろだったから捕虜まで心がいかなかったと言えるところです。

また、難民区に入った中国兵の摘発もありました。摘発は憲兵がやりましたが、中国兵は帽子の跡があるからわかると言っていました。しかし、果たしてそれが虐殺と言えるかどうか。今の平和な時は何とも言えますが、あの時の状況を考えるとそうは言えないと思えます。

ただね、なぜ、降伏勧告した時、中国兵はそれを受け入れなかったかです。もう敗けたのははっきりしています。あとは降伏するだけです。国家全体の降伏ではありませんし、

南京だけ降伏してもいい訳です。日露戦争の時の旅順攻略でステッセルが乃木大将に降伏してますね、あれと同じです。旅順陥落で日露戦争は終わった訳でなく、その後も続きます。南京の場合も、南京の一面面だけ降伏していい訳ですよ。

私は正直言つて、中国びいきです。満州国をつくつたのも賛成じゃない、日支事変も日本がやりすぎたところがあると思つています。しかし、南京の降伏拒否は中国が悪い。しかも、結局、最高司令官の唐生智は逃げてますからね。あれは中国の悪いところで、義和団の時と同じで、清の責任者は最後になると逃げてます。会社がつぶれる時と同じで、責任者がいなければ会社は混乱して、社員は物を持って逃げますよ。

降伏拒否がなければ捕虜の問題も起きなかつたと思います。国際法上、とよく言いますが、国際法上からいえば中国のやり方はまずいと思います」

——下関をご覧になつていますか。

「下関には松井大将と一緒に行きました。南京駅のあるところです。相当の死骸が残つていました。松井大将も私もそれを見ています」

——どの位の死体ですか。

「はつきりわかりませんが、何百といったものです。松井大将が行くというのである程度はかたづけたいと思います」

——松井大将の専属副官の角(良晴)少佐は、下関には何万もの死体があつたと証言していませんが……。

「下関の死体は角君も松井大将も私も同じのを見てますが、何万ということはありません。私は中学に入るため、大正になつて東京に行き、そこで関東大震災を経験しています。その時、千、二千という死体を見ていますが、下関にはそんなに死体はありませんでした。角君は鹿児島の人で、おとなしい人でした。下関の死体が相当印象的だったのでしょう。その印象が残つていて、何万という言い方になつたのだと思います。死体ははじめて見る人にとってはすごくあるように見えますから。

東京裁判では虐殺した数が十萬、二十萬と言われましたが、想像もできない数ですよ。もちろん郊外には戦死体は何万があつたと思います。郊外の戦では日本兵も相当やられてますからね。でも(死体は)市内にはありませんでした。私が自分で見て聞いたことと、戦後、南京事件と言われているのはどうしても結びつかないのです。

(中国兵が)揚子江に逃げたということでしたら、海軍の人が知つていると思います」

——長勇参謀が虐殺を命令したとも言われますが……。

「ええ、当時、長さんがそういうことを言つたという噂を聞きました。『捕虜は殺してしまえ』とか、『戦争なんだから殺してしまえ』と言つたということですよ」

——そういう命令を出したのですか。

「そうじゃなくて、捕虜のことで軍司令部に話があつた時、長さんがそういう暴言を吐いたということですよ。もちろん命令ではありませんし、情報参謀ですから命令できる訳でもありません。周りがその通りとる訳ではありません。長さんは何をするといいこととでなく、

ただ暴言を吐くだけです。それで尾端が大きくなったと思います」
 —長中佐の暴言を他の参謀が注意するということとはなかったのですか。例えば武藤章参謀副長など。

「長さんは言うだけでしたから。武藤さんが何か言ったということはないと思います」
 —松井大将は長中佐をどう評価していたのでしょうか。

「かつてなかったと思います。松井大将は戦争に勝った後をどうするかに頭を悩ませており、しっかりと中国の政権をつくり、中国人の生活を安定させたかったのですが、その工作には和知(鷹二大佐)さんを使いたかったようです。長さんは派遣軍の情報参謀として任命されていますから、そういう工作にある程度使ったのだと思います」

—南京での長中佐の暴言の話は松井大将も知っていますか。

「さあ、どうでしょう。松井大将からは聞いていません。その噂を聞いたのかどうか、松井大将が長を呼べと言ったことはありません」

—松井大将は下関での捕虜射殺の噂は知っていたのでしょうか。

「よくわかりませんが、知ってたかもしれません。もし知っていたとしても、その時は戦だからそうだと思っていたと思います。そうじゃなかったら、松井大将ですから何か言うはずですよ。松井大将という人はのほほんとしてる人ではありませんし、絶対めくら判を押すこともしません。相沢事件(昭和十年八月・永田鉄山軍務局長斬殺事件)が起きた時もけじめをつけなくて、とひとりで現役をしりぞいています。そういうふういきちんとしてい

ますから、自分で感じたら言うはずですよ」

—松井大将にはどなたが情報を入れてましたか、塚田参謀長ですか。

「特に塚田さんということはありません。参謀から情報は得ていたと思います。よく公平さんとか中山さんと話してましたから。それと、南京では武藤さんがほとんど付きつきりでした。武藤さんからも情報は入ってたと思います」

あとは、入るとしたら上海派遣軍と第十軍から入ると思います。中支那方面軍には管理部と参謀しかいませんし、法務部などはありませんでしたから、捕虜とかその他のことは上海派遣軍と第十軍がやっていました。ですから、そこから話を聞いていたと思います」
 —松井大将の側にはどなたがいたのですか。

「高級副官が村上中佐で、角君が専属副官でいました。国際法の斉藤良衛さんは国際問題のことで相談ののつてました。それと、陸士で中国語の先生をやっていた藤本通訳官、笹川軍医長、主計長、車主計大尉などです」

—松本重治氏の『上海時代』によると、十二月十八日の慰霊祭のあと、松井大将が朝香宮軍司令官以下をお叱りになったと言われていますが、何をお叱りになったのですか。

「一般論として注意したのだと思います。戦線の処理にあたっては、と言っていました。軍紀が乱れて、それを言ったのだと思います。松井大将は慰霊祭の時だけでなく、常に軍紀についてはいましていましたから」

—軍紀が乱れていたことを知っていたのですか。

「何件か軍紀の乱れがあったのを知ってたと思います。さきほど言ったように、参謀から話を聞いてますから。ただ、その頃虐殺があったということは誰も聞いてませんから、松井大将も聞いてません。軍紀一般のことを怒ったのだと思います。」

松井大将は潔癖な人で、ひょうひょうとしていますが、芯は強い人です。ものをきはきき言うし、ロボットになる人ではありません。あの長さんが手も足も出ませんでしたから。荒木(貞夫) 大将とは同期で、親しくしてまして、お嬢さんの仲人をやったくらいですが、荒木さんは若い人のおだてに乗ると言って、そういうことははっきり言っていました。松井大将はそういう人ですから、ちよっとしたことでもはっきり言ったのだと思います」

——松井大将は中島(今朝吾中将) 師団長の統帥ぶりをよく思ってたらしいのですが、南京でそんなことがありましたか。

「南京で二人がどうしたということは見てません。ただ、上海に戻ってから『中島師団長は乱暴でよろしくない、物事を考えない、思慮が足りない、上に立つ者としては困ったものだ』と私に言っていました」

——武藤参謀副長が回想録の中で、「松井大将は作戦中も随分無理と思われる位支那人の立場を尊重され、南京の宿舎で、作戦本位に考える某軍司令官や某師団長と大議論した」と書いてます。軍司令官とは柳川(平助) 中将で、師団長は中島中将だと思えますが、岡田さんはその場面にいましたか。

「いませんでした。武藤さんが書いてるとしたらそれは本当でしょう。柳川さんとは議論

したことはあったかもしれませんが。上海で柳川さんのことをよく言ってませんでしたから」

——柳川軍司令官とはレディバード号事件のことで問題があったのでしょうか。

「柳川さんとはもともとよくなかったようです。松井大将は真崎(甚三郎大将) さんとは同期でしたが、よくありませんでしたし、柳川さんは真崎さんの系列ですから、そういうことだと思えます」

——河辺虎四郎中佐(当時作戦課長) の回想録に、南京攻略直後、参謀総長の戒告を読んだ松井大将はまことにすまぬと泣いた、と書いてあります。これが南京虐殺の証拠だと言う人もいますが、この時のことをご存知ですか。

「わかりません。松井大将が泣いたという話は聞いた覚えがありません。軍紀一般ということでしたらあると思いますが、南京で虐殺があつて、それで中央から戒告ということは無いと思います。上海は国際都市なので軍紀をきびしくということはあつたと思いますが、虐殺なんてわれわれが知りませんから、それが中央に伝わって上海まで来るはずがないと思います。松井大将は第三国の権益についてはとことん言っていましたから」

——近衛首相が戦後の手記に(「平和への努力」)、松井大将が東京駅を発する時、南京まで行くと言った、と書いてますが、最初からそういうつもりだったのでしょうか。

「さあ、その話はどうでしょうか。戦争だからどこまで行くか、どこで停戦になるかわかりません。上海で終るかもしれませんが。最初から南京まで行くとは思ってなかったと思います。もし、南京まで行くというのでしたら、和平のため行くつもりだったと思います。」

松井大将は日中和平の考え方の人でしたし、蒋介石とも親しい間柄でしたから。

昭和十三年の二月末、あす日本に向けて上海から凱旋するという晩、松井大将が、李振一、岑徳広、原田少将、白田大佐と私を晩餐に呼び、その席で、日本に帰るが大使となつて来たい、大使になって和平の話をしたい、とおっしゃいました。これが大将の念願だったようです。

東京を出る時、松井大将は、五個師団はほしいと言っています。国民政府が力をつけてきて昔とは違うというのを知ってましたからです。ですから、杉山（元大将）陸軍大臣にも言っています。近衛首相にも言っています。杉山さんはその時、満州事変や第一次上海事変のことが頭にあつたらしく、そんなにいらぬ、と言ったそうです。ですから、松井大将は、杉山さんはよく中国を知らない、と言っていました」

——戦後、東京裁判で南京事件がもち出されますが……。

「本当にびっくりしました。私は松井大将のそばにいましたので、すぐ、伊藤清弁護士と上代琢禪弁護士のお手伝いをするにしましたが、死刑なんて想像もませんでした。東京裁判の被告全員がどんな判決になるのかわかりませんでしたけど、結局、松井大将は訴因が一つでしょう。」

山田純三郎さんについて、孫文の革命を助けた人がいます。しかもこの人の兄の山田良政も国民革命のはじめに清朝に殺されています。そういうこともあり、孫文は山田純三郎さんを徳としてましてね、蒋介石も山田さんが戦後帰国する時、丁重に扱っています。

この山田さんが松井大将をよく知っていて、仲がよかつたので、裁判の途中、私は山田さんに、松井大将のことを蒋介石に働きかけてくれるように頼んだことがあります。しかし、蒋介石から来た返事は、松井大将は日本の代表としてだから仕方がない、ということでした。ですから南京で何があつたからということでなく、シンボルとして首都をもちだしてきて、その時の司令官が松井大将だったということなのです。たまたまその時の中国の政策で松井大将が犠牲になったのです。

日本は中国に攻めて敗けたし、戦争ですから不祥事はありました。だから、その責任として仕方がないと思いました。松井大将もそれを知っていました。

最後に（巢鴨に）会いに行つたのは、松井大将の奥さんと養女と弟の七夫（少将）さんの奥さん、それに私です」

以上が岡田氏の証言である。

第十軍参謀・谷田勇大佐の証言

谷田勇氏は陸士二十七期を優等で卒業した。また、砲工学校高等科も優等で、陸大も出ているから正しく二十七期のエリートである。

しかし、必ずしも中央のエリート・コースを歩んだ訳ではない。それは、谷田氏が皇道派の人脈の中にいたためであろう。昭和十一年の二・二六事件後、皇道派と目された人々

は陸軍から追放され、若くて残った人もその後中央に戻ることはほとんどなかったが、谷田氏もその一人だった。しかし、谷田氏は父・文衛中将が東条英機大将の父・英教中将と陸大が一緒という関係から東条大将から目をかけられていた。皇道派でありながら中將まで進んだのもそのためかもしれない。皇道派最後の中将であった。

谷田氏の異端は戦後も続き、戦後、旧陸軍全体から全く除外された田中隆吉少将と交り続けた。田中少将の死に際しては、陸軍からはほとんど葬儀に参加しなかったが、谷田氏は参加した。また、昭和三十二年にはこれも旧陸軍から白眼視された遠藤三郎中将と共に中共を訪れている。

谷田中佐は昭和十二年十月、陸大の兵学教官から第十軍の参謀に充用された。当時四十三歳で、杭州湾に向う軍艦五十鈴の上で、大佐進級の無線電信を受けた。

南京攻略戦に参加した後は杭州平定に向った。翌年二月、第十軍がなくなった後は、中支那派遣軍の後方課長参謀として残り、徐州会戦、漢口作戦に参加した。その後、第三十八師団参謀長、技術本部第二部長などを経て、昭和十八年五月には皇道派の和平運動に参加した廉を以って、第八方面軍通信隊司令官に追放されラバウルに飛び、ここで終戦を迎えた。

谷田氏は以前から『偕行』にたびたび寄稿しており、昭和五十九年には『龍虎の争い』という大著も出版した。しばらくして、田中隆吉元少将の本が再刊されるとまたそこに寄稿していた。私がインタビュを申し込んだのはそんな時である。うかがいを立てると、七

月十七日午前十時から時間をあけて待っています、と返事が来た。昭和六十年のことである。この時、谷田氏は九十二歳で、もちろん、南京攻略戦に参加した旧軍人の内では最年長者であった。

南京攻略戦の時、谷田大佐は第十軍後方担当の第三課長であった。補給に関しての実質的な責任者である。第十軍に関しては、軍紀の乱れの原因に補給事情をあげている記述もあり、インタビュではこれらについて直接聞ける機会であった。またこの課は捕虜に関する担当課でもあり、その他、谷田氏は第十軍司令官であった柳川(平助)中将と親しく交ったということで、これらについても聞く機会が得られた。

約束の日、通された部屋で待っていると谷田氏が現われた。和服を着ており、堂々として立派な押出しである。九十二歳であるが、衰えとか枯れるというものを感じさせない。部屋には谷田氏と父・文衛中将の肖像画が掲げられており、威圧されそうになる。たずねたいことがたくさんあったこともあり、挨拶もそこそこに質問に入った。

柳川軍司令官は、杭州湾に上陸すると、山川草木すべて敵、と言ったという話があります……。

と、まず質問した。瞬間、谷田氏はびっくりしたような顔をみせ、顔に手をやった。

私が谷田氏にうかがいを立てた時、昭和十二年当時の南京についてお聞きしたいのでお目にかかりたい、と書いた。それに対し谷田氏から、簡単に、お越し下さい、と返事が来た。谷田氏からみれば私がどんな人間か皆目見当がつかない訳である。その上、会うやい

なやの質問がこの様なものだったから、相当驚いたのである。谷田氏はしばらく考えていた。その間十秒くらいあっただろうか。突然、

「まず私の話をしましょう」
と、質問には直接答えずこうおっしゃった。そして本棚にあった『龍虎の争い』を取り出してきて、

「ここに書いてあることですが、この話から始めましょう」
と言いながら話しだした。

話が無駄がなく簡潔で要領を得ている。また記憶もしっかりしている。私が訪問したのが十時、谷田氏が話して一段落した時、時計を見ると十一時を廻っていた。この間一時間をずっと一人でお話しになった訳である。

結局、この日の訪問は三時間にも及び、私は少々くたびれたが、谷田氏は少しもそんな気配を見せなかった。

その最初の一時間に及ぶ話のうち、関係ある部分を要約すると次のようになる。

昭和の陸軍中央部には、思想信念の相違により、いわゆる皇道派及び統制派と称する二つの派閥が対立・抗争していた。

元来日本陸軍はソ連を最大の敵と考えており、これに当たるには日本一国では到底無理であつて、日本国、満州国及び中国が相提携せねばならぬとしていた。そして皇道派は観念論者であるから、その皇国意識に基き、和親を以つて中国に接すれば中国を包容し得るとした。また、統制派は理論的合理主義者であるから、排日抗日の盛んな現在の中国に対しては、口舌を以つてしても駄目であつて、まず一撃を加えてこれを膺懲し、しかる後に手を結ぶほかはないと考えていた。これが両者の対外政策の大きな相違である。

日本陸軍は昭和七年三月上海事変において上海周辺の中国軍を撃破するや、五月までに一兵も残さず日本内地に引揚げている。また、昭和八年四月の関内作戦においては北京を指呼の間に望む懐柔まで進出したが塘沽において停戦協定を結び長城線まで撤退している。共に荒木（貞夫）陸軍大臣時代の出来事で、満州国以外中国本土には手を着けぬという皇道派の思想を表現していた。

およそこのような派閥の話をして下さつた。そして一段落した時、次のように続けた。
「そこで御質問の件だが、皇道派の頭首は真崎（甚三郎大將）、荒木、柳川、小畑（敏四郎中將）などである。その柳川中將が、中国の山川草木皆敵だ、などと言うはずは断じてない。もしそのような記事があつたとすれば、その記事は統制派もしくは同派をひいきにする人が書いた著述であると断じてさしつかえない。

柳川さんは古事記、日本書紀を聖典として尊重する皇道派將軍のなかでも飛びぬけて神がかりの人でね。どこに行かれてもまず神社に参詣して神に祈るといふ人だつた」

こうして最初の質問と答が終わつた。谷田氏は話の途中、豪快に笑つたり、考え込んだり、表情の豊かな人で、私も次第にリラックスし、そのため臆せず聞くことができた。

再び谷田氏が話しはじめた。

「柳川さんは平素保有するその思想信念から、中支那の三角地帯を平定したら、第一次上海事変と同様に中国から兵力を引くべきだという考えであった。柳川さんはこの考えを意見具申もした。柳川さんはあれほどの功績をあげながら、中央部の指示に基き、終始顔写真が出ないようにされた。また、入城式を撮った写真も、柳川將軍の顔を引掻いて発表された。これを見た皇道派の連中は汚ない報復だと憤慨したものである」

「そのようにするのは誰が決めたのですか、杉山（元大将）陸相ですか、梅津（美治郎中將）次官ですか。」

「こんなことは一番上の者が發議するものではない」

「そうすると陸軍省の報道班長などが發議したのでしょうか。」

「まあ、そんなところだろうか」

——河辺虎四郎中將（当時參謀本部作戰課長の回顧録に松井大將と柳川中將とは仲が悪かったとありますが……。

「先ほど言ったように、二人は統制派と皇道派であるから仲が良いとは言われないでしょう。しかし、作戰中は上司の命令通り動かなくてはならない。特別なことはなかったでしょう」

——第十軍の憲兵隊長だった上砂勝七氏の『憲兵三十一年』に、食糧などの揚陸作戰が捗らず、そのため無斷發給が多くなった、これを見ていた經理部長が、こんな無茶な計画では責任が持てないから辭任するといきり立ち、田辺（盛武少將）參謀長の口添えで納まっ

た、と書いてありますが……。

「補給に関しては第三課の責任で、私が課長をしていました。經理部でそういうのなら当然私の耳に入るべきです。各レベル間で話し合いがあり、もしそうなら、經理部の高級部員が私に言うべきです。しかし、私にそんな話があったという記憶はありません。」

第十軍の各部長は予備役少將が多く、經理部長も予備役だった。經理部長自身が諮る相手は參謀長であるが、私の知らないところでそのような話はいくらもありません」

——補給計画が無理ということはありませんでしたか。

「当初の杭州湾上陸作戰はスムーズに成功したが、その後の上陸は四、五日たつても陸揚げが進まなかった。杭州湾は遠浅で潮の干満が激しく、砲車や車両の陸揚げはとても無理だ。十一月十日頃だと思いが、これではたとえ上陸しても道路が悪く、重車両は前進できそうもない。船を上海に廻して上海に上陸するのはどうか、上海なら道路もよく、クリークで運ぶこともできると考えた。」

上陸地や補給基地を移すのは、重大な問題ではあるが、軍司令部とは連絡がつかないので私の独断で決心し、すぐに小畑（信良中佐）參謀を上海にやつた。上海派遣軍はすぐ了解して、上海の南市を第十軍に譲ってくれた。私も上陸していたが、いったん船に戻り上海に向つた。上海から上陸して軍司令部に追及し、嘉興で追いつき、そこで必要な補給はついた。

その後、湖州でしばらく南京攻略の命令を待っていたので、そこで補給はもとより相当

の糧秣彈薬を集積することができた。したがって上陸当初は別として全般的に補給が困難ということはなかった」

——「憲兵三十一年」には「第十軍の軍紀が乱れている」ともありますが……。

「日本の軍隊だけではなく世界共通だが、強い軍隊は軍紀もよいし、逆に弱い軍隊に限って問題を起こす。これは人間の心理でね。弱いから報復的に一層弱い人民に当たるんだろう。日本陸軍でいえば、東北、九州の兵は強く、京都、大阪の兵は弱かった。東北は服従心が強く、九州は自負心が強いという特色を持っていた。第十軍は強い九州の第六、第十八師団が主体であったので、軍紀が乱れているという話は聞いていない」

——遠藤三郎中将（当時参謀本部第一課長）が著書の中で、第六師団はそれまで戦った北支で感状をもらってないし、作戦主任が佐藤幸徳大佐だから、と虐殺をやったように書いていますが……。

「遠藤中将は第十軍のことは直接知らないはずですよ。第十軍司令部は湖州以後第六師団の進路を追随していったが、そんな形跡は少しも見えなかった。死体はあったが、皆中国兵の死体であった。また佐藤大佐はこの頃第六師団からかわっている。第六師団に関して虐殺ということはない」

——第百十四師団麾下の部隊の戦闘詳報に、捕虜を処刑せよ、という旅団命令があったと言われていますが……。

「とても信じられない。旅団長の秋山（充三郎）少将はどんな人か知らないが、師団長の末

松（茂色）中将は予備役召集で極めて温厚な人柄、そんな命令を出すはずはない」

——第三課は捕虜の担当でもあるのですが、どのような考えを持っていましたか。

「特別虐待するとか優遇することもなく、ただ国際法規に従って処理していくべきだと考えていた。事実、作戦間、捕虜に関して問題はなく、戦後、南京事件が発生するとは夢にも思わなかった。南京の時、捕虜はいたが、武漢作戦の時、敵はほとんど奥地に逃げ込んでほとんどいなかった」

——南京城内の様子はどうでした？

「軍司令部が南京城内に入ったのは十四日のお昼直前、十一時三十分でした。中華門から入ったが、付近に死体はほとんどなかった。

三時頃になり、私は後方課長として占領地がどんな状態か見ておく必要を感じ、司令部衛兵一個分隊を伴い乗用車で城内一帯を廻った。下関に行った時、揚子江には軍艦も碇泊しており艦長と会見した。この埠頭の岸辺には相当数の死体があった。千人といったが、正確に数えれば千人以上あったと思う。二千人か三千人位か。軍服を着たのが半分以上で、普通の住民もあった」

——戦死体とは違いますか。

「城内から逃げたのを第十六師団が追いつめて射つたものと思う。これが後日虐殺と称されていているものではないか」

こう言いながら谷田氏はアルバムを取り出した。当時谷田氏はカメラ狂で、出征中も戦

場や身辺の状況をよく撮っていた。そのため現在貴重なスナップが何枚もある。アルバムの写真には一枚一枚撮った月日と、その時の状況が書き込まれている。

十二月十四日の写真には、今述べた入城と視察の際の写真がある。下関を撮ったものもあり、その写真は、遠くに建物が炎上し手前に二、三十人の死体が倒れているものだった。「下関に着いたのは午後四時頃で、建物がまだ燃えていまして、この写真に見えるような死体が二千人位はありました」

と語る。また、アルバムには十二月八日、溧水での第十軍司令部の写真もある。南京攻略を前に軍と隸下師団の作戦会議の写真であって、柳川軍司令官や谷寿夫第六師団長などが映っている。

「この時、柳川中将はくれぐれも軍紀には気をつけるようにと谷中将に言っていました。柳川さんはそういう人です。」

十六日には城壁一番乗りした大分の歩兵第四十七連隊の三一中隊がその時の模様を軍司令官の前で報告し、その後、軍司令官以下が現場の城壁に登りました。その時、城壁の内側に中国兵の死体が数体ありました。

南京城壁を占領したのは第六師団が一番早かったが、光華門を攻めた第九師団には新聞記者がついていて、いち早く報道したので脇坂連隊が有名になった。脇坂次郎大佐は私が陸大兵学教官の時、高級副官をつとめて人柄をよく知っています。

私は十七日の入城式が終って、十九日には杭州平定のため南京を離れていますからそれ以後は存じませんが、十九日までなら広く南京周辺を加えても、死体数は数千ないし一万程度で、まして集団虐殺の跡などは発見できませんでした。したがって、中国側が終戦後の極東国際軍事裁判で主張した数十万という数字は誇大意図的な誇張であると確信いたしております」

——南京城内に約八千の兵しか入らなかったと『偕行』にお書きになっていますが……。

「中支那方面軍が上海派遣軍と第十軍にあらためて城内に入れる部隊数を制限する指示を下しておったからです。方面軍も城内の混乱を避けることを考えていたことが、充分理解できます」

——下関以外の南京の様子はどうでした？

「莫愁湖にも十人以上の死体があった。私が南京で発見した死体はあわせて三カ所でした」

——莫愁湖の死体は軍人ですか、市民ですか。
「今になって考えると軍人だったか市民だったかははっきりしない。半分ずつかもしれない。下関と莫愁湖の二カ所は虐殺と言われているものと思います」

——挹江門にも死体があったと言いますが、ご覧になっていますか。

「もの本には挹江門にもだいたいあるように書いてあるようだ。十四日の午後通ったが、その時はなかった」

——こう言いながらまたアルバムを開く。十四日の挹江門の写真である。写真には三つのアイチを持つ挹江門全体が映っているが、周辺一帯に死体らしきものは見当たらない。

「雨花台でもやったと書かれたものもあるが、そういう死体は全然なかった」
 — 田中隆吉少将が『裁かれる歴史』に、上海派遣軍の長參謀が虐殺を命じたと告白した、と書いています。田中氏と親しい谷田さんはこれをどう思いますか。

「長勇は私より一期後輩の二十八期、陸大もよい成績で卒業していますが、性慷慨義憤己れの正しいと思つたことは直往邁進身を挺してやり遂げようとする男でした。昭和の横断的派閥の三番目である桜会では、橋本欣五郎中佐と共にその中心人物であった。昭和六年の十月事件が未然に発覚して失敗に帰したのも、長大尉の不軌独行が原因の一つになっている。しかしながら友と交わるには意外に謙讓で礼儀正しく、私に対しても同名の故か、はなはだ親切でありました。

長の性格をみて、話のようなことはやりかねない。しかし成文として軍命令を下達するには軍司令官の決裁を受けなければならぬから、いくら長でも独断で成文を出したとも思われません。軍に命令受領に来た隸下部隊の參謀に口頭で伝達したのでしよう。そんな噂は長く中支にとどまっていたので耳にしました。現に捕虜を斬殺した者のあつたことは承知しております」

— 中島（今朝吾中将）第十六師団長はどんな方ですか。

「第十六師団もよく噂にのぼつた。第十六師団は京都師団で弱い部隊だから、前に述べたように何か問題を起す可能性はある。中島中将は長くフランスに駐在し、ハイカラな軍人であつたから、噂のような処置をとるとは思えないが、他面これを抑える力も強くなか

つたであらう。現に私が見た下関の死体は第十六師団により行われたものであつた」

— 広田豊大佐が、昭和十三年一月末に本間雅晴參謀本部第二部長に同行して上海、南京、杭州に行つています。外国權益問題処理のためと言われていますが……。

「広田は私と陸士の同期生でね。陸士の成績は優等ではなかつたが、陸大では大いに勉強したらしく、軍刀組に入つていた。

視察終了後、本間さんはそのまま東京に帰られたが、広田は中支那派遣軍司令部付となり上海に事務所を開設し、外国權益に関する業務を執つていた。私も中支那最高司令部の後方課長であるから、度々在留外国人と折衝したが、広田の業務も後年の如く困難苦心することはなかつたようである。

昭和十三年十一月、武漢一帯を攻略した中支那派遣軍は、その後中国軍に反攻の気配もなく、作戦の後仕末も終わったので漢口の戦闘司令部を撤し、南京に帰還、三たび持久態勢に転移した。

この間、日本政府は上海に中支那振興株式会社を設置し、經濟開發の最高機関とすると共に、各種日支合弁の國策会社を設立して鉄道、船舶、通信、国土開發、はては電気、水道事業などの經營にまであたられた。そして中支那派遣軍司令部はこれら業務の現地指導を行なうことになつたので、南京帰還後は軍事業務のほか、政治經濟機關の性格を帯びるにいたつた。ことに後方担当の第三課は經濟指導を行なうので寸暇もないほど多忙であつた。従つて課長以下日中官民と接觸して、これを理解しかつ中支那の風物に親炙する機会

がはなはだ多くなつていった。

この時、中国官民と親交を重ねたが、たとえ酒食の席においても南京虐殺に関する話を聞くことはなかった。このことから絶対、後年中国が主張するが如きものではなかったと信ずるものである」

以上が谷田大佐の証言である。

第十軍参謀・金子倫介大尉の証言

金子倫介大尉は、陸軍省整備局に勤めていた昭和十二年十月中旬、第十軍の後方担当参謀を命ぜられ南京攻略戦に参加した。第十軍には十四人の参謀がいたが、その中でも最も若い参謀で、当時三十二歳である。後方担当の第三課は、課長の谷田勇大佐と小畑信良中佐、金子大尉の三人であった。

金子大尉は翌年二月下旬に再び元の陸軍省整備局に戻った。ちょうど第十軍が編成されると共に参謀になり、解散すると共に戻った訳である。

東京に戻ってから、整備局、参謀本部第三課に勤めたのち、昭和十六年の初夏にアメリカ駐在員を命ぜられている。交換船で日本に戻ってきたのは昭和十七年夏である。その後、第八方面軍参謀、第四航空軍高級参謀などをとつとめ、終戦時には軍需省軍需官をつとめていた。その時、四十歳、大佐であった。

当時、最も若い参謀であったといっても、既に八十歳である。金子氏自身は健康であるが、奥様の健康がおもわしくないので、三年前から、食事付きで医師のいる有料老人ホームに移った。金子氏は週二回会社に出勤し、休みの日は奥様の看護という毎日である。話をうかがったのは、昭和六十年十二月、この老人ホームのロビーであった。

——南京に入ったのはいつですか。

「補給とか後方の警備とかで忙しくて、南京に入った時の印象がほとんどありません。たぶん、下つ端だったので南京に入る時も別の仕事をやっていただけだと思います。

どういふ理由で軍司令部に行ったのか覚えていませんが、南京突入の前に雨花台の軍司令部に行っている時、城壁に日の丸があがったのでシャンパンを抜いたのを覚えています。南京では、この雨花台の軍司令部にいた時のことだけははっきり覚えていいます。

また、南京の軍司令官の部屋で、第六師団の伍長が、はじめて城壁に日の丸を立てた時の様子を柳川（平助中将）軍司令官に報告した席にも列席していました。

鉤をつけた綱を引つ掛けて登り、途中、綱をゆすられた、と伍長は言っていました。最初に日の丸をあげたので軍司令官が呼んで、その時の様子を聞いたのだと思います。伍長が城壁に日の丸を掲げたのは十二月十二日十二時ですから、この報告は十三日か十四日のことだと思います」

——南京城内に入った時、南京の様子はどうでしたか？

「南京に入ったのは十三日か十四日だと思います。城内では一人の死体も見えてませんし、一発の銃声も聞きませんでした。南京に入っても、私は杭州転進業務がありましたので、一晩泊って、もしかすると二晩かもしれませんが、すぐ南京を出ました。どうも南京の城内の印象は薄いのです。印象に残るようなことがなかったのは、特別何もなかったからだと思います」

——十七日の松井（石根）大将や柳川中将の入城式はご覧になってますか。

「全然記憶にありません。その頃は杭州に向っていたと思います」

——南京では虐殺があったと言われていますが、何か見てませんか。

「私が杭州湾から南京までの間に見た死体は、はつきり覚えていきます。最初に見たのは杭州湾上陸点で、そこには新しい軍服を着た日本兵の戦死体がきちんと並べて寝かせてありました。新しい軍服がいやに目につきました。ここでは、たこつぼの中の中国兵の死体も見ています」

その後、南京への途中では、自動車に轢かれて内臓が出ていた中国兵の死体、地蔵さんのような形で道路際に座って死んでいた中国兵、それと雨花台の十キロほど手前で、ふくらんだ死体を見ているだけです。これらははつきり覚えていきます。あとは死体を全然見ていません」

——第十軍は上陸直後の金山や、南京城外の雨花台で激戦をやったと思いますが……。「私は常に後方にいましたし、兵站線しか通ってませんので、いま言った死体しか見てい

ません。戦闘があつて、死体は出たかもしれませんが、私が行った時は始末した後だったかもしれません」

——それでは、その頃南京事件は聞いたことがなかったのですか。

「ええ。聞いたことはありませんでした。戦後、東京裁判で聞いてびっくりしました。何か隠しているとか、言い決まっているとかいうことはなく、本当に南京では何も見てません。南京では印象に残るようなことはなかったのでしょうか」

——南京を出た後は、まっすぐ杭州に行つたのですか。

「そうです。最初は杭州攻撃という命令は出てなかったと思います。とにかく杭州転進という事で、兵站線のこともあり、まず私が向つた訳です」

杭州転進中に特別戦闘はありませんでした」

——杭州では軍司令部と一緒になるのですね。

「ええ。西湖といい、真ん中に島のある湖のそばに軍司令部がありまして、ここで正月を迎えました。杭州に来てから、後方担当ですから慰安婦の手配もしました。請負人がおり、これと金額の上限を決めました。たしか五十銭だったと思います。士気低下を防ぐためという名目でした。兵隊同士の喧嘩などは少なくなったように思います」

——二月上旬に本間（雅晴少将）参謀本部第二部長が外国権益問題で杭州に行つてますが、お会いになってますか。

「さあ、全然知りません」

以上が金子大尉の証言である。

企画院事務官・岡田芳政氏の証言

当時、企画院事務官であった岡田芳政氏の身分は文官であった。しかし、正確に言えば、もともと軍人で、陸軍省から企画院に外向していたのである。

岡田氏は陸士三十六期、山本景藏著『陸軍廢幣作戦』では岡田氏を次のように紹介している。

「辻政信氏と陸士、陸大とも同期で、辻と並ぶ俊秀と称せられた明朗闊達な人物であった」岡田氏は陸軍大学校を卒業後、参謀本部支那課に配属になり、二年間勤務ののち、駐在員として中国に渡った。昭和十年一月から四月までは北京に、五月から翌十一年二月までは南京に、二月から暮までは広東に駐在した。南京にいた昭和十年の秋には蔣介石の五十歳の誕生日のお祝いが盛大に南京で行われている。昭和十二年一月に日本に帰り、四月から東京帝国大学経済学部に入學した。当時、陸軍から毎年、二、三人が陸軍省軍務課付として東京帝国大学に派遣されて三年間聴講することになっていた。岡田大尉も三年の予定で入學した。しかし、入学早々支那事変が起きたため、東京帝国大学での勉強は打ち切りになり、そのまま軍務課付として企画院外向を命ぜられた。当時、企画院は重要な国策の企画、立案を次々に行い、そのため各省のエリートが外向していた。企画院では中国経済

開発の研究、立案のため第三委員を日比谷公園の旧国会議事堂の建物の中に設け、ここに陸軍省、海軍省、外務省などから一名ずつ外向したが、この時、陸軍省から外向したのが岡田氏である。岡田氏が南京に行ったのはこの時のことで、三十四歳であった。

一年数カ月の企画院外向ののち、昭和十四年三月、参謀本部第八課に戻り、中国に対する謀略に従事することになった。そして、昭和十四年九月には支那派遣軍参謀になり、情報参謀として、ひきつづき謀略工作に従事した。終戦時は大佐、第六方面軍（漢口）の第二（情報）課長であった。

岡田氏は明治三十六年生れで、お話をお聞きした時は八十二歳であった。しかし、きわめて元気で、ほとんど毎日外をかけずりまわっているほどである。何度かお話をお聞きしたが、場所はいつも虎ノ門の霞山クラブである。ここは東亜同文書院出身者のクラブで、その名を東亜同文書院を作った近衛霞山公からとっており、中国と縁の深い場所である。

——支那事変前、南京に一年間ほどいらっしやった訳ですが、その時の南京の様子はどうでしたか。

「私がいいた昭和十年から十一年頃の南京は、城内の北半分に新しく政府の建物などが建てられたばかりで、ほとんどの住民は南半分に住んでいました。国民政府の首都といっても、中国の中心地は上海でしたので、政府の部長クラスは週末になると、みんな上海に行き、誰もいなくなってしまう状態でした。上海は華やかで、一方南京には何もありませんから